小野小町の「花の色は移りにけりな わが身世にふるながめせしまに」は、女性が老いを嘆く歌？

～疑問を持ったら調べてみる気持ちをもとう～

百人一首に限らず、どうなのかなぁ、、そうなのかなぁ、と不思議に思うことってありますよね。そんな時には、自分なりに調べてみる習慣をつけましょう。考える力がつき、想像力も豊かになり、読解力も身についていきます。国語力はすべての基本ですので、成績もあがることここでは、私が調べてみたことをお伝えしたいと思います。学ぶということの参考にしてみてくださいね。

老いを嘆く歌って、ホント？

これは、女性が年をとって老いてしまったことを嘆く歌ですよ～、って聞いたこと、ありませんか？

「花はむなしく色あせてしまった。春の長雨がふっている間に。そして、私の容姿もむなしく色あせてしまったわ。いたずらに世を過ごして物思いをしている間に」

と。

え～っ、そんな意味ぃ？

と女性としては複雑な気持ちになったりします。

この解釈に異を唱えているのが『ねずさんの　日本の心で読み解く百人一首』。

才色兼備の小野小町がそんな歌を詠むかなぁ。そんな意味だったら、そんな歌を千年二千年と後世に伝えていきたいって、選者は思うんだろうか。う～～～ん。。。

ほんとは、「もう若くはないけど、まだつややかさを失っていないわ。散っていないわよ。まだまだ燃えるような恋がしたいわ」という反語的な意味を持っているのではないか、と。

ざっくり言うと、そんな感じ。
で、
私は、はたと考えたのです。
この話も、もっとものよう。

そう解釈する根拠はなにかな？どこに書いてあるんだろう。

誰が言っているんだろう。と。

興味を持つと、調べたくなるのが、人の常ですよね。

そこで、できれば昔の人が書いた解説書、なにかいいのないかなぁ、、と探し出会ったのが、これ。

『新潮日本古典集成　古今和歌集』（奥村恆哉　校注　/新潮社）

この本は、江戸時代に刊行された北村季吟『八代集抄』の『古今集』を底本と

しているそうです。

さて、小野小町のこの和歌は、「古今和歌集」の「春歌下」に載っています。

奥村氏の解説によりますと

もしこの歌が、容姿の比喩と解するなら、「雑歌」の部にあるべき内容であるし、

この説には根拠がないので、言葉通りに理解するべきだ、そうです。

（意味）

花の色は衰えて、色あせてしまった。春の長雨が降り続き、私は世を過ごすための空しい（むなしい）心づかいにかまけて、花をみる余裕もなかった、そのあいだに。

徒然なる春の夕暮れの、長雨に降りこめられた憂愁が詠いあげられています。

「言葉通りに理解すべき」

『萬葉集』には萬葉集の特徴が、『古今集』には古今集の特徴があります。

万葉集には、俗語や日常語を大切にして自分の気持ちを詠うような句が収められているのに対し、古今集は、表現が明晰であることが求められました。

「冗語を排し、誤解を許さない、それが『古今集』詞書の文体なのである」

「歌の素材選択においても、より明晰であろうとする志向は顕著で、諸作品みな、輪郭がはっきりした対象以外、つかもうとしない。「余情妖艶の体」は、誰

も詠まなかったのである。たとえ詠んだとしても、それが『古今集』二十巻のうちに採られることはなかった。」

『古今集』が編まれた時代の律令制社会、秩序を、そのままに。

『古今集』は紀貫之の一貫した思想に支えられています。

紀貫之にとって価値があったのは、人間と自然のあるべきありようだけ。私的抒情の割り込む余地はない。編纂方針にも、歌の配列にも、素材の取り方にも、それがはっきりとあらわれているのですって。

歌の配列には、『萬葉集』と異なって、四季の部は季節の推移に従い、恋の部は恋愛の展開に従い、順序正しく、機械的ともいえるほど正確に配列されている。この世のあり様、人間のあり様を、自然の鼓動、人の呼吸に沿って写し取ろうとしている。

取り上げられた同一の素材、桜なら桜、月なら月は、一群にまとめておかれ、この配列基準は厳格だそうです。

一定の厳格なルールに基づいて、歌が選ばれ、配置されているのが、『古今集』だとすると、「春歌下」の部にあるということは、素直に季節を詠った歌、と受け取るべきなのですね。

この歌、どうも

齢を重ねることを憂える女心は、関係なさそうなようです。